

第12回 アート知っとくミーティング

— 図工・美術・書道の教育の魅力を探る —

日 時： 2016年8月28日(日) 13:30~17:00

場 所： 大阪教育大学天王寺キャンパス 西館4講義室
(大阪市天王寺区南河堀町4-88)

特定非営利活動法人 アート知っとく会

— プログラム —

○第1部 天津市の書法教育—瑞景小学校の例を中心として 13:30~14:30

報告者：張 莉（大阪教育大学）

○第2部 子どもたちとの絵本製作 14:30~16:00

大阪市立豊崎小学校全校児童 155 名と絵本作家田島征彦で作った絵本「かんこうさんがふってきて」（くもん出版）の製作過程、現場や指導の様子など、取り組みについてご報告いただきます。

報告者：内部 恵子（元大阪市教諭）

○第3部 みんなで話し合おう 16:00~17:00

日頃、図工・美術、書道教育に対して抱いている疑問や思いを参加者同士自由に語り合います。

司会進行：福光 敬子

(敬称略)

アート知っとくミーティング報告（第12回）

第1部 天津市の書法教育—瑞景小学校の例を中心として

張 莉

はじめに

私は日本に来る前には天津市少年宮で書道の教師をしていた。1996年留学のため来日した。天津少年宮において、年一度日本の小学校と交流しており、今まで30年間続いていた。私はかつて天津市少年宮に勤めていた時に、子供たちを連れて2度日本に来たことがある。そのことが私の日本留学のきっかけである。最近の2、3年、天津に帰った時、書法に特色がある天津市北辰区瑞景小学校を数回訪問した。昨年10月大阪教育大学書道専攻の学生を引率し、この学校を見学した。本日は瑞景小学校を中心に、天津少年宮の書法教育について話したいと思う。天津市の特徴的な書法教育を深く検討し、教育現場の指導方法を探ってみたい。そして、日本と中国の書道教育を比較してみたいと考える。

I. 瑞景小学校の書法教育

瑞景小学校は2006年9月創立され、22クラス、学生数約750名、教職員約50名の学校である。「特色ある書法学校」に指定されている。この学校は書道のみならず、教育に先進的な考えを取り入れることで有名である。当校では書を特色として、書法の授業に特にウェイトを置き、様々な取り組みを展開している。

1. 書道に触れる環境づくりの工夫

学校キャンパスに入り、校舎の周りには書体の変遷、書道古典作品を刻した石が点在する。26個の石上に甲骨文、金文、小篆、隸書、楷書、行書、草書の歴代名家作品が彫られている。子供たちは毎日触れることができる。また、

一. 瑞景小学校の書法教育



1. 書道に触れる環境づくりの工夫

■ 学校キャンパス



壁一面「千字文」



キャンパスの壁一面に「千字文」が彫られている。(喬強先生の書作品)

校舎に入ると階段の壁に「今天你微笑了吗? (今日あなたは笑いましたか?)」と大きく書かれている。笑うことが幸福の第一歩であるという当たり前のことが毎朝この掲示によって確認できる。物事を楽しむことの大事さを端的に示す。正面玄関には大きなスポンジ筆がかけられてあり、スポンジ部分に水をつけ、黒いタイルの床に書道の文字をいつでも練習できる。

二階の壁には「知之者不如好之者、好之者不如樂之者(これを知る者はこれを好む者に如(し)かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。)」と論語の一節が書かれている。好んで行うのとそうでないのとでは書法の出来栄えが違い、好んで行えば、何よりも充実感が得られるところがすばらしいという意味である。二階の階段の壁には「微笑乃是具有多重意義的語言(笑うというのは多くの重要な意味を持つ言葉である。)」が書かれている。三階の階段の上には、「路漫漫其修遠兮，吾將上下而求索(路が長いけれど、私はその上下を探索する。）」、「多讀一本書，多活一個人人生(一冊多く本を読むと、一つの人生を多く生きることができる。)」が書かれ、三階の図書館には篆刻風の文字で「佩文雅閣」が、壁には王鐸の書が(壁紙として)貼られている。

書道の練習のための部屋があり、そこには大きく、「書香墨韻(書の香り、墨の音韻)」、「書法靜心(書道は心を静かにする)」、「墨香育人(墨の香りは人を育てる)」、「字里人生(字の中には人の生き様がある)」と書かれている。私はこれらを見て、目からうろこが落ちるような思いをした。字も書道もそれらを深く探っていくと、そこには人の生き様が見える。廊下に

一階には、出勤した先生の出席を表すカードの上に指定された四字熟語の吉祥句を各々の先生が黒板に板書するようになっている(一週間月～金曜のテーマは喬強先生の手本)。書道に力を入れるにあたって、児童のみならず先生も字を上手に書くように日々練習しなさい、との意味だろう。それぞれの教師が朝の出勤時に精いっぱい字を書く姿が目につく。朝から真剣勝負の一瞬である。これは当然、登校してきた子供たちの目に入り、その日の先生の出席とその書の出来栄えを子供たちの小さな目で確認できるのである。「持之以恆(根気よく続ける)」の文字が飾られている。

このように、この学校では子供たちが書法教育を受ける環境が十分に整っている。日本の小学校では、ここまでの書道環境を目にすることはないのであろう。



「今天你微笑了吗?」
(今日あなたは笑いましたか?)



スポンジ筆



知之者不如好之者、好之者不如樂之者



微笑乃是具有多重意義的語言



路漫漫其修遠兮，吾將上下而求索



多讀一本書，多活一個人人生



佩文雅閣



書法靜心，墨香育人



書香墨韻，字里人生



蘭亭序



出勤簿

2. 書道の喬強先生の研究室

部屋の入り口に飾り言葉:「樂書學堂」「雙修藝苑」「景賢書屋」「求實」「耕耘」「尋真」がある。学校で一番優れている部屋であり、10m平方ぐらいの大きい部屋である。これを見ても書法の先生を大事にし、いかに書法教育に力を入れているかがわかる。



3. 祭りの風景 (第2回書法芸術教育実演会の場面)

子供たちは筆を持ち用法をもとにした踊りを踊る。子供たちは書作品を見せるパフォーマンスをする。先生たちが着ている服は紙でできており、その上に字が書かれている。先生方の板書展示(漢詩を書いている)もある。喬強先生の作品を披露する場面がある。



4. 日常の書道の課外活動

廊下の壁には子供たちの書道作品が展示され、優秀作品コーナーが設け、月一回入れ替える。校内では毎月、テーマを決めて校内コンクールを実施している。そのコンクールで優れた生徒の能力を引き出し、他の生徒の向上を牽引している。訪問時には、硬筆作品のベスト10を優秀者の写真付きでたたえている



光景が見られた。生徒同士を競争させる。その効果として、天津市のコンクールでもこの学校の生徒に受賞者が非常に多く、その実力は中国国内でトップクラスである。この成果は瑞景小学校の理念とその実践の結果として、必然的に生じたものと思われる。

2010年より、教員の書法研鑽として、生徒・教員ともに昼休みの15分を毎日書法の練習にあてている。毎週火曜日午後3:30~4:30教員書道研修時間を設ける。毎週一回課題(硬筆一枚、毛筆一枚)を提出してもらう。教員に対し定期的に学期末に試験を行う。書法知識、硬筆技法、毛筆技法、板書を含む試験を行う。其の研修時の作品を玄関前のギャラリーに毎月展示することで、教員同士が切磋琢磨を競うようになるのである。教科の異なる教師全員が書道を教えることができる。

書法エリートを育てるため「蘭亭クラス」を設ける。喬強先生担当。

昼3時以後に子供たちの下校が始まる。生徒は下校する際に、クラスごと口をそろえて漢詩を朗読しながら(暗唱し)門まで歩き、そこで整理してから各々が門を出て行く。皆大声で、声を合わせて元気いっぱい。この光景に私は大変心を打たれた。



5. 現場での書法授業を見学

見学した5年生の書法授業では、「慎独」の2文字を「九成宮醴泉銘」を参考に創作するという内容の授業が行われていた。「九成宮醴泉銘」を鑑賞し、そこから文字を偏と旁に分け、「慎」「独」に似た文字を探す。練習用の紙は半切サイズの画仙紙に「米字格」の赤い枠が並んで印刷されているもの。点画の位置や角度の目安がつき、書くときの助けとしている。法帖の上にプラスチックの透明な板のようなものが置いてある。画仙紙に印刷されている枠と全く同じ形の枠がプリントされている。中国の書法教育は、徹底的に手本に近い臨書を行うことに向けられている。日本では比較的、子供に元気で力強い字を書くことを求めるがそのような発想は中国には全くない。中国の教師は「ほめて育てる」ではなく、「叩いて育てる」という考え方が強い。



6. 楊曉春校長先生の教育方針

学校の方針について楊校長先生から伺った。孔子の言葉に「真楽」という言葉がある。そこから、瑞景小学校は3つの楽として、一に楽教(楽しく教える)、二に楽学(楽しく学ぶ)、三に楽在(楽はキャンパスにあり)をモットーとしている。更に「快樂中発展、発展中快樂(楽しむことの中に発展があり、発展の中に楽しみがある)」とも言う。この考え方は、まず教師において徹底され、生徒の人格を変えるほどの心の教育として成果を上げている。その成果は、活発で素直な生徒の態度を見るとすぐにわかる。学校と地域が一体になり、基本方針が徹底されており、生徒全般にもこの考え方がしみ込んでいる。

そして、何よりも素晴らしいのは、子供の感性を大事に育てながら教育を一つの方向に自信を持って迷いなく実行しようとする、女性の楊曉春校長先生と書道の喬強先生の一貫したものの考え方と行動力である。こんな素晴らしい小学校が、私が生まれた天津にあることを誇りに思う。



二. 天津市少年宮の例

私は日本に留学する前は、天津市少年宮で書道を教えていた。少年宮とは学校の放課後や土・日曜日などに、芸術や体育などの科目を教えることを目的として作られた学校である。天津市少年宮では約 30 学科 400 余りのクラスがある。学科としては、声楽・楽器演奏・舞踊・絵画・書法・将棋・コンピューター・英語など、芸能、芸術分野や化学の分野、語学にまで至る。年間約 9000 人が通学する。

書法の教師は約 10 名で、生徒は約 1000 名である。5～8 歳の児童が対象で、前期・後期に分けて募集する。以前は小中学校の中で、特定の科目で優秀な学生が選抜され無料で通っていたが、現在では希望すればだれでも入れ、月謝のような形で、費用を徴収している。現在での費用は、前期・後期に分けて、半年で 18 回、費用は 240 元、日本円では 3300 円ほどで、年間ではその倍になる。私は現在の職中「美術科」に所属し、天津少年宮では書道と美術がいろいろな科目の中で一番盛んであった。

展覧会活動も多く行われている。天津市少年児童国際美術・書法展覧会が年一度開催され、これには中国・イタリア・スペイン・日本の児童が参加している。毎年競書大会、筆会(有名人の指導を受ける)があり、定例の展覧会が 2～3 度開催される。

1. 書法授業の指導法

(1) 臨書

中国の書法の学習は、同じ手本を何年もの間反復学習するのに対し、日本では、楷書、行書、草書、仮名、篆刻などを一通り学習する。例えば欧陽詢を習った人は、小中学校の間、十数年間ひたすらずっと欧陽詢を習い続ける。顔真卿・柳公権を習う人も同じである。それほど基礎的な学習が求められ、重視されているのである。「臨書」を重視し、習う方法に三つの種類がある。

①「形臨(けいりん)」: お手本どおりの形を書くことで、それによってハネ、止め、線の大小・強弱などの運筆や字の形を学ぶ。

②「意臨(いりん)」: お手本の字を覚えて、お手本を見ずに書くこと。

③「背臨(はいりん)」: 創作もふくめ何も見ないで自分のイメージで書くこと。

「意臨」も「背臨」も字を上達させるためのかなり高度な手法である。

(2) 指導法の手順

まず、「描紅(びようこう)」: 赤色で印刷されたお手本の上で墨をふくませた筆でなぞって書く。次の段階、「五歩法(ごほほう)」がある。

①「双鉤(そうこう)」: お手本の上に薄紙をのせ、鉛筆でお手本の字の輪郭を書く。つぎにその紙をお手本からはずし、字の輪郭線のなかにおさまるように墨をふくませた筆で書く。

②「単鉤(たんこう)」: お手本の上に薄紙をおき、字の中心に線を引いたものを手本として毛筆で書く。

③「格臨(かくりん)」: 「米字格(べいじかく)(漢字一字を書くます目にコメの字が赤の点線が入ったもの)」と「九宮格(きゅうぐうかく)(漢字一字を書くます目に赤で 9 つの四角が書かれたもの)」を使って、お手本を見ながら毛筆で臨書する。

④「框臨(きょうりん)」: 例えば、書道用紙に折り目を付けて、その枠内に一文字ずつ臨書するやり方。

⑤「背臨(はいりん)」: 上記のとおり。

2. 書法授業の教材

少年宮は初級、中級、高級の三つのクラスに分かれている。それぞれのクラスには、「顔真卿コース」「欧陽詢コース」「柳公権(りゅうこうけん)コース」「趙孟頫(ちょうもうふ)コース」というようにお手本とする書家ごとのコースがある。この4つのコースはどれでも楷書で、欧陽詢→肉と骨・顔真卿→肉多く力強く・柳公権→骨多い・趙孟頫→柔らかい感じとそれぞれの個性がある。

三. その他の書法に関する学校

1. 天津市少児書法学校

天津市の小学生を対象として課外授業として教える学校である。2000年～2004年約10000人以上がここで学んだ。教師は20人位である。授業料は年16回(一回1時間～2時間)で156元、日本円に直すと約2500円になる。

硬筆と毛筆に分ける。硬筆は万年筆を使用し、一番初めに学校で編集された「規範字」を習う。この学習によって基礎ができた時点で「壺飛経」(唐代の鍾紹京の書)を手本として使用する。毛筆は子供によって教材が相異なる。楷書は欧陽詢の『九成宮醴泉銘』と顔真卿の『勤禮碑』の二種類のうちどちらかを選択し、5年ぐらい同じ手本を臨書する。同じ教材を5年にわたって行い、その書法がある程度完成してから次のステップである行書・草書へと移っていくという方法をとっている。日本では到底信じられないやり方であろう。

初中(中学校)の学生は隋代の『蘇孝慈墓誌』と『魚美人墓誌』、北魏の造像記と『張猛龍碑』、隸書の『禮器碑』を臨書する。高中(高校)の学生は行書の王羲之『蘭亭序』、草書の『草訣百韻歌』(明代の韓道亨の書)を臨書する。

天津市少児書法学校は2004年10月に名称を天津市少児書法教育中心(センター)に変更した。少児書法学校では対象が児童、生徒、学生のみであったが、教育センターでは、学生、成人、教師に書法を教えることを主とするように変更された。

2. 大学の書法教育

南開大学では「東方芸術学部」の中に書法があり、また、天津大学では、「王学仲芸術研究所」が設けられている。天津師範大学でも、「芸術学院」が設けられている。天津理工大学・天津美術学院においても「書法」が選択科目で設置され、研究生(日本の修士課程にあたる)の試験科目の一つとして書法がある。更には、天津老年大学は30年前からあり、定年になった人が、いろいろな学科をここで学んでいる。その中でも、書法を学ぶものが多く、展示会が年一度開催され、優秀な作品がここから排出されている。

四. 日本の書道教育の比較

1. 現在の中国では「書法」というのに対して、日本では「書道」という言葉が使われる。中国ではまず形より入って文字の臨書というテクニックに重きを置くのに対して、日本では書道の「道」という語の中に精神的な鍛錬や芸術的な美や真理の追求を含ませているところが考え方として特徴的である。日本では小学生の書が上手かどうかだけではなく、元気さや個性が尊重されるが、中国では臨書手本にどれだけ忠実に書くが最も大事とされる。
2. 中国では小学生から書法を始めた場合、中学校卒業までぐらいまで、楷書ばかりを練習する。中国には古くから「永字八法」があり、例えば他の字を書かず「永」字だけをまず千文字臨書するような練習方法もある。中国では徹底的に基礎学力を育成する。中国の楷書は欧陽詢、顔真卿、柳公権、趙孟頫を基礎とするが、欧陽詢を習う人は欧陽詢のみを、顔真卿を習う人は顔真卿のみを学習する。このようなやり方はどこでも徹底されている。
3. 日本では半紙2文字～4文字を中心とした臨書が基本であるが、中国では3～5cm四方ぐらいの文字の臨書を基本としている。日本の臨書は形臨と意臨を含むが、中国の場合は、徹底した形臨である。
4. 日本では小学校3年に毛筆習字が始まって、最初仮名と簡単な漢字を練習するが、中学生になると行書を書き始める。日本では書写が上手になると平行して、書写された文字の理解や鑑賞を目的とする。
5. 同じ中国内でも、北京や天津などの北派は伝統的な書を重視し、上海や杭州、蘇州などの南派ではある程度個性を認めた書子供頃の頃から教える。

五. 日本と中国の書の違い

1. 中国の書法においては同じ手本を何年も反復練習するのに対して、日本では数年の間に篆・隸・楷・行・草を一通り学習する。中国では一つの手本をそっくりそのまま書くことを重視し、日本では子供たちの個性や楽しく飽きずに書くことを重視している。

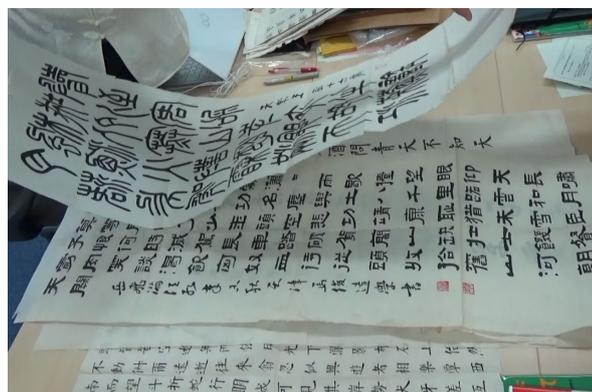
中国では「写誰象誰」という言葉があり、習った書法は欧法や顔法にどれだけ近づき得たかが目的とされる。欧法を習った人は顔法をかけなくてよいし、顔法を習った人は欧法を書けなくてもよい。ただ欧法や顔法の書法学習があるレベルまで達成しないと次に進めない。それほど基礎的な学習が重視されている。

2. 日本の書道は大変個性的であるが、中国の書は臨書中心で日本に比べて個性がないかもしれない。しかし中国において優秀な書家の中には、臨書を超えて自ら独自の表現法に到達している人もいる。その人たちの書は個性的には見えるが、自然の理法に適った調和がある。この点では、日本も中国も習字の方法が異なるが、書の到達すべきところは同じであるのかもしれない。
3. 日本では墨の濃・淡・潤・渴を使い分けて書表現する。仮名の表現のバリエーションが漢字表現の中にも見受けられる。また近代になって墨象のような書も生み出されている。中国では濃く磨った墨をたっぷりと使って力強く、くつきりと書き上げることを書の基本としている。日本のように淡墨で書かれた作品や、かすれの多い作品はほとんどと言ってよいほどない。

おわりに

このように、天津市では書法教育が今も盛んに行われている。体系的に書法の指導とその結果を検証するための展覧会が開かれている。特に瑞景小学校では、児童に対する教育の一番大事なこととして、楽しんで学習することを第一に挙げている。アメリカのマクドナルドのレジにはお客さんには見えず従業員のみに見えるように「スマイル」と書かれている。マクドナルドは 1940 年の創業以来、「Smile is free(スマイルイズフリー:笑いは 0 円)」を基本理念として捉えている。笑顔は言葉以前のコミュニケーションであり、それが接客の上での最大のサービスにもなるのである。教育に必要な理念は、何も難しいことではなく、当たり前のことをきちんと実践することなのである。それから、楽しく勉強をすること、これに勝る学習の上達法はない。「あなたは今日笑いましたか？」というフレーズを、小学校の各教室の壁に張り紙してみませんか。きっとそれだけで、児童は反応すると思われる。教育は生活する上において必要な知識を教えるところだが、基本的には真・善・美をバランスよく追及する人間を育てることである。

教師として、何を学生に教えるべきかについてよく考えるが、私は学生にまず、最初に教えたいことは、学問を勉強することは楽しいということである。いままで知らなかったことがわかって、知識がどんどん増えていく。人間の好奇心にとって、これほど楽しいことはない。どのような学問についても、知識の奥は深い。ある程度のことが分かってきても、その奥にはわからない未知の領域がいっぱいある。学問をすることの楽しさを知っている人は、更にその奥の知識を知ろうとする。こういった勉強を通じて、ものごとを理解するための思考方法を学ぶのである。学生たちは、やがて社会人として旅立っていくが、たいいてい人は会社で働くことが社会人としての出発点になる。社会人の中で、一番幸せな人は、仕事を楽しくやれる人だと思う。私は学生に、将来そのように仕事を楽しくやれる人になってほしいと常々思う。そのためには、まず笑顔で人にむきあうこと、それから、目の前の仕事について一生懸命やること、仕事を創意工夫してより効率的な仕方を考えること、が必要である。私の考え方は、瑞景小学校の教育方針と全く同じである。こういった物の考え方をぜひ学生たちが大学にいる間に学んでほしい。そしてそのような人材を一人でも多く育てることこそ、教師が一番しなければならない仕事だと思う。日本の伝統文化である書道を体系的に指導できる学校教育を考えていくべきであろう。手書き文字文化である書道文化を、国を挙げて働きかけ大切にするような学校教育を希望してやまない。



天津の子どものコンクール入賞作品

質疑応答

A : 子ども達が朗読する詩はどのような詩ですか。

張 : 唐の時代の李白、杜甫などの、たとえば「春眠暁を覚えず」のような教科書に記載されている詩です。中国では小学校3年生から漢詩を習い始めるのですが、毎日一首ずつ暗記しなければなりません。学校は8:00に始まるのですが子どもは7:30から一人ずつ暗唱しなければなりません。暗記できていない子どもは教室の外で暗記します。始業時までに暗記できない子どもは休み時間にも暗記し、昼休みまでに暗記できない子どもは昼食を食べずに暗記しなければなりません。それでもまだ暗記できない子どもは放課後も練習し、暗唱できるようになれば職員室へ行き、先生が認めてくれればそこでやっと帰宅できます。

B : 放課後になっても覚えられない子どもはいないのですか。

張 : 1日に覚えなければならない詩は、五言絶句か七言絶句一首だけですので、そのような子どももいることはいるのですが数は少ないです。

C : それにしても毎日百人一首を一首ずつ覚えるより量は多いので大変ですね。

A : ここで「暗唱できる」というのは、音を覚えるだけではなく書くこともできるようになるということですか。

張 : 「暗唱できる」ということは、当然書くこともできるということです。

A : 中国でも同じ音をもつ漢字が幾つもあると思いますので、音を覚えても正しい漢字で書くことができることにはならないのではないですか。

張 : 詩を暗記する時には、普通は書きながら覚えます。順序としては、まず漢字で書けるようになってから、つぎに音を覚えます。書いて覚えているうちに意味も理解できますので、書けるようになれば意味も理解できるようになっているので、書けるようになれば音を覚えることはかなり簡単なことです。

C : 毎日覚えなければならない詩は、どこかに書かれているのですか。

張 : 黒板の横に「今日の一首」という欄があり、そこに書かれています。

C : 教科書や板書の字は縦書きですか横書きですか。

張 : 今は両方とも横書きになっています。

C : 漢詩はもともと縦書きで書かれたものですが、それを横書きに書くことに違和感をもつ先生はいないのですか。

張 : 現在は先生も横書きになれているので、違和感を感じる先生はほとんどいないと思います。ただ、横書きということよりも、現在の中国は漢字のもとの書体である「繁体字」ではなく、漢字を簡略化した「簡字体」を使っており、漢詩や三国志なども「簡字体」を使った本も販売されていますので、その点に違和感を感じている先生はいると思います。

A : 簡字体にしても、漢詩には子どもがまだ習っていない字も出てくるのではないかと思います。詩を暗記する時に子どもは習っていない字も覚えなければならないのですか。

張 : はい、習っていない字でも書いているうちに覚えられます。

C : 李白、杜甫以外にはどのような詩人の詩がとりあげられているのですか。

張 : それ以外には白居易ぐらいでしょうか。

C : なるほど。そうすると唐の時代の詩人の詩集である「唐詩選」にでてくるような詩が主になっているのですね。

張 : そうです。

C : 絶句だけで律詩はとりあげないのですか。

張 : 律詩は長いので、小学校の高学年ではいくつか出てくるかもしれませんが、基本的には中学校で扱います。

C : 大阪大学で私が教えている中国からの留学生が「蘭亭帖(らんていじょう)王羲之が書いた蘭亭集序の法帖。行書で書かれており、行書を学ぶものは必ず手本にする」の字を書きたいと言ったので、私が「それではそれをやっごらん」というと、その学生はまず「蘭亭帖」の最初から最後まで暗唱し、その後で「ここからここまでが大切な部分なので、そこを書きたい」と言っていました。

D : たとえ詩を暗唱することができたとしても、小学生に詩の意味は理解できないのではないのでしょうか。

張 : 詩の意味は先生がやさしい言葉で説明します。

C : 日本で先生が子どもに百人一首の説明をするとき、優しい言葉で説明するのと同じなのですね。

張 : 学校で扱う漢詩も、最初は李白とか杜甫ではなく、あまり有名ではない、たとえば「お米はお百姓さんが心を込めてつくったものなので大切にしましょう」などのやさしい詩です。

B : 日本で書道は、学校で指導する教科のなかの一つの教科としての国語のさらに一部ですので、書道だけを集中的に時間をかけて扱うことはできないのですが。

張 : 中国でもそうなのですが、それでも他の教科も書道も学習のための十分な時間を確保しています。そこで学習内容の全体的な量はとても多く、子どもはとても忙しい学校生活を送っています。たとえば、私の友達がバスに乗っている時に重そうなカバンを背負った子どもが乗ってきたので、席をかわってあげようとしてまずカバンを席に置こうとしたときに、その重さにびっくりしたという話を聞いたことがあります。また、中国の最近の新聞で、小学1年生のカバンの重さは10kgほどある、という記事を見たこともあります。

B : 今日見せてもらったような字を書くためには、筆も紙もある程度品質の良いものでなくてはならないのではないかと思います。

張 : ここでお見せしたのはコンクールに出品されたものですので、ある程度良いものをつかっていますが、普段使うものは特に良いものということはありません。練習するときにはこのような画仙紙ではなく、わら半紙や包装紙のような紙です。

B : この絵で使われている水彩絵の具やパスなどは子どもが持ってくるのですか、それとも先生が準備するのですか。

張 : すべて先生が準備します。

- A : 瑞景小学校の学校目標の三つの「楽」についてですが、「楽教」は先生の目標で、「楽学」は子どもの目標で、「楽在校園」は先生と子どもの双方の目標だと思うのですが、日本では学校目標は「このような子どもを育てたい」という子どもを中心に据えた表現が一般的です。中国の学校目標は瑞景小学校のように、先生の目標、子どもの目標、先生と子ども双方の目標という三つの立場からの目標が並記されるのが一般的なのですか。
- 張 : 中国では「教学相長」、つまり先生は教える中で成長し、子どもは学ぶ中で成長することが基本的な考え方です。また、先生には「子どもに一杯の水を与えようとするれば、先生はバケツ一杯の水を用意しておかなければならない」という考え方があります。
- A : この「楽」という字の意味は中国でも日本と同じ意味で使われているのでしょうか。
- 張 : 「楽」の意味は「楽しい」ということで中国でも日本でも同じ意味です。しかし、ここで特に「楽」という字が使われているのは、中国の教育は今まで「楽しいものではなく、苦勞し努力すべきものだ」という考え方が一般的でした。しかし、現在は日本のように「教育を楽しいものにしよう」という傾向が芽生えてきています。そこで、この小学校では「楽」という字を先駆的に強調して使っています。つまり、今までの「学習は苦勞し、努力すべきもの」と言う考え方のもとでは、子どもはいつも「真剣に先生の話をおきき」で自分の考えを述べる機会がほとんどなかったのですが、「楽」という言葉を教育に取り込むことによって、子どもの考えも重視すべきであるということを確認しようとしています。私が以前中国の学生を日本につれてきたときに、すべての学生が「日本の教育は楽しそうで、羨ましい」と言っていました。
- A : 日本では「楽」という字は「リラックスしていて、楽しい」という意味以外に、たとえば「苦樂」という言葉のように「苦しみ」の反意語として「苦勞しない」というよう意味でも使われることがあるのですが。
- B : 大阪の教育界で「楽しい」という言葉を使うと「楽しいだけではダメだろう。目標は何か。資質能力の何が向上したのか」「もし楽しいだけで良いのなら、それは学校でなくても家庭でもできるだろう」という意見がでるでしょうね。
- C : 「楽」という字には本来「精神を自由にすること」という意味があるのではないのでしょうか。「楽」という字の概念は中国の宋の時代の詩人、文章家の蘇東坡(そ・とうば。1036-1101)のころからいろいろな変遷をとげてきたのではないのでしょうか。
- 張 : 孔子(前 551-前 479)の開いた儒教の根本的規範として「礼楽(れいがく)」という思想があります。「礼」は社会の秩序を保つことで、「楽」にはさまざまな解釈があるのですが「人の心を感化する」という意味が一般的です。そこで、ここで使われている「楽」という字にもその意味が含まれていると思います。
- C : ここで使われている「楽」という字は、いままで張先生が説明されたすべての意味を含んで使われているのでしょうか。
- 張 : 学ぶこと、どんどん新しい知識を得ることは楽しいことである、という意味です。
- B : つまり、書道では「お手本どおりの字が書けるようになることの楽しさ」という意味での「楽」なのでしょうね。
- A : 次に、先生についての質問なのですが、若い先生の場合には学校の方針がどのようなものであれ努力しさえすればついて行けるのではないかと思います。年配の先生にとっては自分の苦手なことを一から学ぶことはかなり困難なことではないかと思うのですが。
- 張 : 中国の先生の定年は55歳なのですが、40-50歳ごろからは管理職になる場合が多く、直接子どもの指導にあたることは少なくなっています。また、転勤もありますので、ある学校に勤め続けなくてもよいのです。
- B : 以前、私のクラスに中国から転校してきた子どもがいたのですが、その子どもの話では、中国では子どもの人数が多いので2部授業の制度をとっており、最初のクラスの子は朝7:30頃から午後1:00ごろまで授業があり、後のクラスの子はその後から夜まで授業があるということでした。それに比べると瑞景小学校の子はとてもすばらしい環境の中で教育を受けているのだなあと思いました。中国の中で瑞景小学校は特別に恵まれた学校なのでしょうね。
- A : 今のB先生の質問に加えて伺いたいのですが、中国という国は多くの民族によって成り立っていると聞いたことがあるのですが、教育制度の充実の程度は地域や民族によって異なるのでしょうか。
- 張 : 中国は56の民族によって成り立っていますが、中国の小学校には「一般学校」と「重点学校」の二種類の学校があり、教科書も重点学校用のレベルの高い「A 教科書」と、一般学校用の「B 教科書」の二種類あります。重点学校で学んだ子どもの95%は良い中学校に行けるとい統計がありますし、良い中学校で学ぶと良い高等学校に行ける・・・というように「重点学校」はいわゆるエリート教育の最初の段階なのです。瑞景小学校は重点学校なのですが、学校は街中の交通の便利な所ではなく郊外にあります。一般の小学校では児童総数が3,000人程度で1クラスの人数が50人程度であるのに対して、瑞景小学校の児童総数は750人で1クラスの人数が35人程度ときわめて少人数での教育がおこなわれています。また、瑞景小学校は2006年に創立され、回りにはマンションが立ち並んでいる、環境に恵まれた新しい学校です。
- B : 瑞景小学校は天津から車で2時間という、かなり不便な所にあるのですが、子どもをこの小学校に入学させるために、家族ぐるみ学校の近くに引っ越すというようなこともあるのでしょうか。

張 :はい、あります。でも子どもを重点学校に入学させるために、1年前に引っ越しをしても入学することはできません。また、これは良い制度だとは思えませんが、重点学校に入学するために最近できた制度があります。それは、学校に寄付することによって、入学に必要な点数の1%以内を限度に、点数をかき上げてもらえるという制度です。その寄付をもとに学校独自の教育がおこなえますので、学校を運営する校長にとってこの制度はありがたいことです。

また、今お見せした瑞景小学校の展覧会の賞についてですが、たとえば1等賞は2名、2等賞は5名、3等賞は10名などのように入賞者数は決まっていますが、入賞するとたとえば1等賞は10点、2等賞は5点、3等賞は3点というような点数を、中学校への進学のための内申書に加算してもらえるということもあります。

C :重点学校のなかには、たとえばこの学校は書道を、この学校は音楽をというように学校ごとにある教科を特化して教育をおこなっているということはあるのですか。

張 :はい、あります。ですから校長先生は自分の学校ではどの教科・分野を重点化し、特色づけるのかということを考えなければなりません。そこで、校長先生がたとえば書道に力を入れようと考えたとすると、書道の有能な先生を、他の先生より高い給料をだすとか、家を用意するとか、学校に研究室を準備するとかなどの良い待遇で招聘するのです。最初はそのような良い待遇で来た先生も、もし途中で待遇が悪くなれば別の待遇の良い学校に転職してしまうということもあります。

C :瑞景小学校は書道を特化しているのですが、書道の専門の先生は一人なのですね。

張 :はい、国語の先生はすべて書道を教えるのですが、書道の専門の先生は一人で、他の国語の先生はその先生の指導のもとで書道教育をおこなっています。

C :そうすると、校長先生にとって特別待遇で来てもらう先生を選ぶということは、学校の運命を左右するとても大切なことなのですね。

張 :そうです。ですから書道に特色をもたせている学校はわずかしかありません。また、書道に特色をもたせている天津の学校の中でも、ある学校では硬筆(ペン字)に重点をおいています。

B :今のお話から、私は学校を特化すること以上に、中国の長い歴史・文化を守り、次世代に伝えていこうとする強い意思を感じたのですが、中国にも全国的な教育レベルを保つための、日本の指導要領にあたるようなものはあるのですか。あるいは、すべての学校に共通するそのようなものはあるけれど、瑞景小学校はそれとは別枠のカリキュラムで指導しているということなのでしょうか。

張 :中国にも日本の指導要領にあたる「課程標準」というものがあります。私は、書道の「課程標準」の日本語訳を最近国会図書館で、東京学芸大学の『東アジア書道研究』の2号か3号の中で見つけることができました。しかし、重点学校のためだけの「課程標準」はありません。また、学校教育における書道の位置づけですが、中国では、書道は昨年までは日本の小学校と同じように国語科の一部としての「書写」として位置づけられていました。ですから、書道だけが上手でも受験のときにはそれは評価されなかったもので、国語の先生のなかには書道の授業をせずに、その時間を受験に有利な国語の学習にあてるといったことがありました。でも、今年の9月から書道は独立した教科として扱われるようになりました。

A :美術の「課程標準」の日本語訳もあります。中国からの留学生が修士論文の資料として『全日制義務教育・美術課程標準(実験版)』2001年7月第1版の全文を翻訳したものが『平成17年度 美術科研究 第23号』に掲載されています。大阪教育大学の図書館のホームページからでも見られますので興味のある方はご覧下さい。

張 :ここでご紹介した教材はすべて、教科書ではなく参考書に記載されています。また、教科書も学校独自で作られその学校のみで使われているものもありますし、一般の学校でも使われているものもあります。たとえば、これは(図版)一般に市販されているものですが、日本のように検定を受けなければならないというのではなく、どの教科書を使うかはそれぞれの学校の先生が自由に決めることができます。

A :C先生はこれをご覧になって、日本のものと比較するとどのような共通点、相違点があると思われませんか。

C :中国のこのような書道の学習方法は私が大学生のころに、執筆者の大半は日本人で一部中国の方も入って、『書道基礎講座』というタイトルで日本でもすでに出版されていました。その時思ったことは、日本では肉筆の書をお手本とすることが多いのですが、中国では古典のものと字をそのまま、たとえば字の欠けた部分は欠けたままで、お手本としているのだなあということでした。

張 :そうです。中国では石碑の拓本をそのまま手を加えずにお手本として使っています。以前にもお話しましたが、中国で字を学ぶ時にはある先生の字を学ぶのではなく、古典の字を学んでいるからです。

C :そうです。お手本の拓本からは「線」を見ることはできず、「輪郭」や「形」だけが見えるのです。日本では「線そのもの」を現代の人が書いてみせるのです。そこで、日本の小学生から大学生までの人たちと中国の少年宮の人たちが交流をしたときに、日本の子どもと中国の子どもの字との違いは一目瞭然でした。そして、その違いは「求めているもの」の違いから来ていると感じられました。たとえば、日本では「ここはフワッと書いて、つぎはスーッと書こうね」というような指導をするので子どもの体もリラックスしていますが、中国では筆の持ち方、動かし方、姿勢などすべてを決まった通りおこなうようにという指導をしています。このような日中での指

導には、たとえば、日本の指導法では字が崩れることがあります、中国の指導法ではそのようなことは起こらないというようにそれぞれメリットとデメリットがあります。そこで中国の子どもたちから見ると、日本の子どもは字が多少ゆがんでいてもそれを気にせずサーッと書いているように見えるので「伸び伸びしている」ということになります。そのような意味で日本では「線」を書いているのですが、中国では1本の線を書くのにも日本の子どもの十倍ぐらいの時間をかけて「お手本どおりの字」を書いていると言えます。極端な表現をしますと、中国ではあらかじめ決まっている輪郭のなかに上手く墨を塗る方法だと言えるでしょう。でも日本では、平安時代に仮名が生まれた時点で「形」ではなく「線」を求めることが始まったと言えるでしょう。

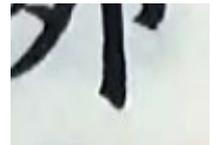
D : 漢字は、中国では一つの漢字には一つの読み方・発音しかないのですが、日本ではいろいろな読み方・発音があるように、中国では一度決まったものは決まったものとして扱っていくのですが、日本では一度決まったものでも状況や必要性に応じて変化させていくという違いと同じことではないのでしょうか。

張 : そうですね。日本では「線の勢い」を重視していますね。

D : 日本では一つの漢字を書くときに、「二度書き」禁止と言われたりしますが、中国では「一度で書く」のでしょうか。

張 : そうです。中国では書く一字一字を「彫り込む」ように書きますね。日本では筆を傾けて書く「側筆(そくひつ)」が認められているのですが、中国では字の中心に筆を通す「直筆(ちよくひつ)」しか使いません。たとえば「右の払い」をするときに、中国ではまず筆を逆方向の左へ持っていき「逆入(ぎやくにゅう)」つまり筆の軸を筆の進む方向とは逆方向に少し傾けなければ、筆を常に字の中央にとどめることができません。

C : そうです。ですからその点で中国と日本は大きく異なっていると思います。中国の書の縦線の終わりは右図のような「はね」のある形になっています。日本の場合は、もちろん指導される先生によっても違うのですが、一般的には、筆を入れて縦に運べば自然と図のような形になるのではと考えるのですが、中国ではこの形をあえて作るように塗るのです。



張 : そうです。でもそのように書くと、線を面としてだけしか表すことができないので線の立体感がでてこない、と中国では考えます。

A : 今のお二人のお話は私には理解できないのですが。

C : もしここに筆と墨があれば、たとえば1本の縦線だけからでも、張先生と私の書く線が違うということが説明できるのですが…。

D : どこが立体的で、どこが平面的なのかよく分からないのですが。

C : そうですね。筆で書いた字が「立体的」であるはずがないですからね。(笑)

D : でも、私たちが知りたいのは外面的なもの、目に見えるものではなく、内面的なこと、目に見えないことですから。ですから、ある字を見せていただいて「ここは立体的」「ここは立体的ではない」と説明していただければ分かりやすいと思うのですが。

張 : 例えば、右図の「浪」と「洵」の縦線は違います。私は「洵」の縦線は良い線だと思います。(紙を裏返して)この線は裏まではっきりと墨が通っています。しかし、「浪」は通っていないのでよくありません。



C : 私たち日本人からすると「浪」の縦線は「穂先が浮いている」と言いますね。

張 : なるほど。私は「洵」の縦線は立体感があると思います。でも「浪」にはありません。

C : なるほど。そういう意味では同じですね。「立体感がある」ということは、つまり「字が深い」ということですね。

張 : そうです。「深い線」を「立体感がある線」というのです。表面的に書くのではなく、彫刻刀で木を彫り込むように書くと「深い線」「立体感のある線」が書けるのです。

A : それは線の太さではなく、書き方に関係があるんですね。

張 : そうです。たとえばこの字のこの線は細くなっていますが、この線には針のような力強さがありますね。

C : D 先生、結局これは「知っとく会」の第8回で書いてもらった「筆のバネをきかせる」ということと同じことなのです。極端に言いますと、トーストの上にバターを塗るように書いた線と、S字をつかってバネをきかせてしっかり書いた線との違いである、とも言えると思います。あるいは、これは「力を入れる」という意味ではないのですが、筆を立てて筆の感触を感じながら書いた字と、普通に書いた字との違いが「立体感の有る無し」になるということなのです。

D : その深い感じが字に現れてくるということなのですね。

張 : 別の見分け方をいいますと、紙を裏返してみるとしっかり書けた字は裏まで墨がしみ出してくるのです。この子どもの字は裏まで墨がしみ出していないので、中国では「しっかり書けていない」「基礎ができていない」という評価になります。

D : 墨が紙の裏までしみ出すかどうかは、運筆の強さではなく早さに関係しているのではないかと思うのですが。つまり、ゆっくり筆を動かすと墨は紙の裏までしみ出すのではないかと思うのですが。

C : 墨がしみ込むというのと、筆が立っているというとは別のことです。

A : 「彫る」ということだけで言いますと、木を彫る場合よく切れる刀でスツと彫る場合と、切れない刀で力を入れて彫るという二通りあるのではないかと思うのですが。

張 : 筆の動きをあまり遅くしすぎると墨が滲んでしまいますので、適当なスピードで動かすということもあります。

C : 「文字の線」の問題について語ることは、書道にとって大きな課題なのでしょうね。

張 : 「線」は書の命ですから。

B : 書道で大家と言われる人は、すべてそのような線を習得されているのでしょうかね。

D : 先生が黒板に書く「板書」の字にも同じことが言えるのでしょうか。

張 : 板書はチョークで書くので、筆で書く字とは違うものです。

B : 国語教育の芦田恵之助(あしだ・えのすけ。1873-1951)先生の国語科教授法では、板書を美しく書くことは授業のもっとも大切なことのひとつで、子どもは先生の書いた板書をもとに解説していくので、チョークがつぶれるぐらいしっかりと美しい字を板書しなくてはならないとおっしゃっています。

D : 書道のなかに「板書」という分野はあるのですか。

C : 教育系の大学では、特に理科系の男子学生が教育実習に言ったときに、ひどい板書をして指導の先生に叱られるということはしばしばありますね。

B : 私も教育大学の出身ですが、大学で板書について学んだことはまったくありません。ですから、板書は私にとってはずっと大きな課題で、私の板書は誰にも見られたくないと思っていました。

C : B 先生はそれでもきちっと板書ができておられたのですが、今の学生のなかにはほんとうにスゴい字を書く人もいます。ですから、すべての教育系大学に板書の講義が必要になってきています。

B : 子どもは授業中には板書を見ながら理解を進めていくので、文字以外にもレイアウトも大切だと思います。大きな字ばかりで書いても、小さな字ばかりで書いても子どもは見にくいからです。研究会では、板書のレイアウトは問題にされましたが、字の美醜については問題にされなかったと思います。

張 : この写真(図版)は中国での板書の例です。

B : 中国で先生は板書の字を書くのに時間をかけて書きますか。

張 : それほど時間はかけないと思います。

A : チョークの持ち方には望ましい持ち方というのがあるのですか。

張 : いえ、ごく普通に持てば良いと思います。

A : この写真の板書は、字の入るところと終わるところが美しいと思ったので質問してみました。

張 : 私は、万年筆を買った時、太い線と細い線の両方が書けるように、まずペン先を少し曲げています。最初からペン先を曲げた万年筆も売っているのですが、私は自分が書きやすいように自分で曲げています。中国の学校ではボールペンはほとんど使わず、小学校1、2年生までは間違えても消しゴムで消せるように2B、3Bなどの濃い目の鉛筆を使い、3年生からは万年筆を使います。

C : オーストラリアの小学校では1年生はフェルトペンを使っていました。

B : 日本でも小学校1年生で、最初に漢字を大きく書く時にはフェルトペンを使います。

C : それはどうしてなのですか。

B : 大きな字を鉛筆で書かせますと線が薄くなってしまいますので、紙の裏まで滲まないフェルトペンを入学時に購入してもらいます。

福光: 時間がきましたので他に質問、ご意見がなければこれで終わります。張先生ありがとうございました。

第2部 絵本「かんこうさんが ふってきて」－155人の子も達と田島征彦との絵本づくり－ 内部 恵子

1. はじめに

昨年、大阪市立豊崎小学校の全校児童155人が、絵本作家の田島征彦氏と、一冊の絵本をつくりました。そのタイトルは、『かんこうさんが ふってきて』。かんこうさんというのは天神祭りで名高い大阪天満宮に祀られている菅原道真公の愛称です。お話のストーリーも絵も、全部子ども達が考えたので、完成まで半年かかりました。

実はこの絵本づくりは、創立100周年を迎える豊崎小学校の記念行事の一つでした。ちよど学校には「じごくのそうべえ」で有名な絵本作家田島氏のお孫さんが二年生に在籍されていました。そこで先生方は、田島征彦氏と子ども達で何か造形的な活動ができればしないかと考えられたのです。田島氏が提案されたのはこの絵本づくりでした。

一昨年、豊崎小学校の図画工作科研究授業の指導講師で一年間関わった私も、この絵本づくりを応援することになりました。しかし、私はこれまで学年の子ども達と世界平和を願った壁画を描くアートマイルの体験はあっても、全校児童で一冊の絵本をつくったことはありません。しかも豊崎小学校は都会のど真ん中にある普通の小さな学校。歴史に残る由緒ある遺跡も史実も無いのです。果たして絵本はできるのだろうか、実際にどう進めたらよいのだろうか、と最初は私も心配でした。

しかし、豊崎小学校ならではの活動が一つありました。300校ある大阪市の小学校の中で、唯一、能楽体験をしている学校だったのです。子ども達は毎年四年生になると、プロの能楽師に能楽を学び、本物の能楽舞台上で発表するのです。それを活かさないかと考え、昨年の五月末、絵本作家の田島氏と娘さん、能楽師の山本博通氏、学校側と私で、初めての話し合いをしました。



2. テーマ設定

山本氏は、天神祭で馴染みのある菅原道真公を描いた『雷電』という能楽を話のベースにしては、と提案されました。ただ、菅原道真公は、覚えのない罪で大宰府に流され、無念の死を遂げます。そしてその怨みをはらそうと天皇の居所に雷を落として暴れまわるといふ怨念の権化のような人物でもあります。こんな菅原道真と豊崎の子ども達をどう絡ませるのか・・・これは難題でした。

この閉塞感を突破したのは田島氏のひと言でした。

「身に覚えのない罪に陥れられたり、いわれのないいじめに悩む人は、現在でも多くいる。苦しみや怨みや怒りでずたずたになった人の心を、どうすれば和らげてあげられるか、これを絵本のテーマにすればどうか。」

こうしてテーマも決まり、子ども主体の絵本づくりをすすめることを互いに確認し、絵本制作がスタートしました。

3. ストーリーづくり

六月初め、子ども達と「絵本づくり」の初授業。

最初に田島氏が「絵本は絵で感動を伝えるもの」と話され、自作の絵本「じごくのそうべえ」と「ふしぎなともだち」(昨年の日本絵本賞「大賞」受賞作品)を、スクリーンに絵を映しながら読まれました。味のある絵と朗読に子ども達はぐっと引き込まれていました。

その後『雷電』の菅原道真が雷の姿になって豊崎の町に落ちてきたならば、と仮定して「泣きたいほど怨みがいっぱいの人々の心を穏やかにするには、どうすればよいか皆で考えよう」と子ども達に語りかけられました。それを受けて、子ども達から意見を引き出し、みんなの思いをまとめて行くのは私の役目でした。

「みんなで慰める」「楽しいことをして嫌なことを忘れるようにする」「ドラえもんに解決してもらおう」「タイムマシンで昔に戻って話し合う」「豊崎の町のいいものを見せる」など、子ども達からはいろいろな発言ができました。田島氏はアニメやタイムマシンの登場はどうかかとやんわり否定しながらも、活発な子ども達の発言を面白そうに聞いておられました。

この数日後、田島氏からメールが届きました。「本当に豊崎の町を見るだけで、菅公さん(道真の呼称)の恨みがなくなるものか？」この鋭い指摘に私は驚きました。まさにそうです。それは安易な筋書きだったかも、と。



田島先生による 自作絵本の朗読

「じごくのそうべえ」
「ふしぎなともだち」



絵本のストーリーを、みんなで考える

怨みいっぱいの菅公さん
の心を鎮めるには？

アニメやタイムマシンの登場は安易・・・

後日、子ども達に菅公さんと同じような辛い思いをした経験はなかったかと聞くと、「いじめられたことがある」「友達がいじめられているのを見て見ぬふりをしたことがある」などいろいろ出てきました。子ども達の集団での学校生活、どの学校でも十分ありうることです。こうして主人公は、菅公さんといじめで苦しんでいる少年「としぼう」の二人になりました。ストーリーの大筋も、「いじめられっ子のとしぼうが、豊崎の町に落ちてきた雷の菅公さんと出会う。一緒に豊崎の町を巡っているうちに、としぼうは、いじめっ子達と仲良くなる。子ども達みんなが楽しそうに夏祭りの太鼓をたたき姿を見ているうちに菅公さんの怨み・怒りも静まっていく。」と決まりました。

いじめられっ子の登場で、単に道真公を慰めてあげる良い子の少年でなく、自らの悩みゆえ道真公に深く共感できる生身の少年像が浮かび上がりました。また、単なる平安時代の菅公さんを慰めるストーリーでなく、いまの問題と繋がる現実味のある内容になりました。

4. 絵で表現①（事前のイメージ画）

あらすじが決まると、「これ以後は文章でなく絵で表現していく。文章に凝りだすと文章が口説く長くなる。文章は短く、絵でテーマを表現する、これが絵本成功の鍵！」と田島氏。大事なひとでした。

そこで子ども達は全員、はがき大の 19 枚の白紙を綴った冊子に、自分の考えたストーリーの絵を鉛筆で描き始めました。

六月半ば、子ども達のつくったミニ絵本の発表をしました。多様な内容がありましたが、共通していることは絵がアニメっぽく、時間の経過とともに場面が細かく描かれていることでした。

田島氏は、子ども達に絵本と漫画の違いを説明されます。漫画は行動の連続を絵で表し、筋も絵で説明する。が、絵本は「めくる芸術」。めくってアツと驚く楽しさが大切。順序よく全部説明しない。めくるたびに物語が動き、場所が移る。アップにしたり、俯瞰したり、遠くから映したりと、カメラで映画をつくるつもりで描く。絵本では一枚の絵で多くの情報や登場人物の心情を伝える工夫が必要。

さらにストーリーには起承転結が大事。中でも大切なのは「転」であり、その転ではひっくり返るような事件が起きる等々。絵本づくりのポイントを子ども達に話されました。これは私にとっても新鮮で刺激的な助言でした。

次は個々のイメージを持ち寄り、全員でストーリーの具体的な展開を決めていきます。「豊崎で荒ぶる心が癒されるような場所とはどこだろう」と問いかけると、子ども達は日常暮らしている身近な場所を次々とあげていきました。

校区にある千年以上も前に建立された豊崎神社。初詣、七五三、夏祭り、餅つきと、折々に参拝するこの神社には神木の楠の木が涼しい木陰を広げています。神社の夏祭りでは、子ども達も獅子舞・太鼓・笛・傘踊りと、多くの役割を担っています。

地域は都心の梅田の側ですが、緑あふれる公園も多く、北を流れる一級河川の淀川にはいろいろな鳥が飛来し、写真愛好家も集まります。ふれあい農園、ふれあい喫茶と、子ども達と地域のお年寄りとの交流の機会も多くあります。みんなで話し合い、菅公さんの荒ぶる心が鎮まる場面が絞られて行きました。

こうしてできたストーリーは 19 の場面に分割され、全校児童が場面ごとに分かれました。登校班の異学年集団で高学年が低・中学年をリードして進めていきます。お話の場面をどんな構図・色・形で表すか子ども達は迷いながらも、一人一人が描いたイメージ画を持ち寄り相談することから始まりました。

5. 絵で表現②（模造紙に描く）

7月に入り、ようやく描画です。

まずは実際に描く大きさの模造紙にポスターカラーで描きます。場所は講堂。描画環境設定は大切です。前日、学校の先生方と時間をかけて準備しました。

まず、全面にブルーシートをしきつめます。二十色程のポスターカラーも2〜3グループ毎に用意。絵の具は牛乳パックを十五センチの高さに切ったものに3センチほど流し入れ、そこに自分のパレットに絵の具を取り分ける大筆も入れておきます。自分の絵の具セットを持っていない低学年にも絵筆を用意し、パレット、太さの異なる筆、水入れ、タオル等も準備しました。

欠かせないのは、菅公さんの服装や太宰府へ流される船等、その時代の様子が分かる資料や、豊崎神社の夏祭りや天神祭の写真でした。それらをよく見て、自分の表現に活かして描くからです。

文章のスペースを残して、自分たちの分担場面を描きます。最初はどのグループも戸惑った表情で、大きな画面、初めて使うポスターカラーを前に固まっていた。まずは誰が何をどこに描くのかを決めます。

木や船や川など描きやすそうなところから描く子には「中心人物から描こう」船から落ちそうな場面の描写に困っている子には「友人にポーズをとってもらって見ながら描こう」など声をかけているうちに、子ども達は恐る恐る手を動かし始めました。

子ども達が苦勞して描いた模造紙の絵は、全校児童で鑑賞します。その絵を見て田島氏は端的に助言。

「この花壇の花はもっと丁寧に描き込もう」「もっと大胆に勢いのある激しい雨にしよう。白色をもっと使って」「祭りの場面に人が少なすぎ。百人描こう。みんな違う格好にして」「お婆ちゃんの髪や服が若すぎる」「漫画のようなかわいい雷様じゃない。この場面の雷様は怒っているんだ」。

これらの田島氏の助言を子どもたちは真剣な表情で受け止めていました。みんなが描いた絵は講堂の壁に貼って鑑賞します。こうして描かれた絵を全部を見ることで、子ども達も絵本の全体像を具体的に掴んでいきました。

登場する子ども達の服装の形や色や柄、菅公さんの服装や髭の形もこの段階で統一しました。

6. 絵で表現③（絵本原画用の用紙に描く）

本番用の分厚い紙に描いたのは七月半ば。146×73センチの大きさと、厚みも重さもあるこの上等な紙に下書きなしで描きます。「うまく描こうと思うんじゃないよ。元気に描けばいいんだ！」という田島氏の声が講堂に響きわたります。

最初、躊躇っていた子ども達も徐々に手を動かし始めました。大きな紙に太い筆で大胆に描く快感！失敗しても大丈夫。白のポスターカラーでさっと消せば、また新たに描き直せます。子ども達は何度も描いては消しを繰り返したり、他のグループの絵を参考にしたりしながら、思いにかなう絵を描いていきました。

驚いたことは田島氏が助言はすれど、終始、子どもが描く絵に手を出されなかったことです。一箇所だけ、背景の色を何にするか子ども達が迷っている時に、色作りを演示して見せてもらいましたが、それ以外は言葉のみでした。

「僕が細かく言えば、子ども達は萎縮するからね。子ども達の悩みと、道真の怨み・怒りが豊崎の町の中をめぐるながら解けてゆくという映像が、子ども達の絵で素朴に表現されるといいね。」と、じっと子ども達を見つめておられました。

絵は夏休みになっても、完成しません。そこで子ども達はプール水泳の後、連日学校に

描画： いざ本番、緊張する子どもたち



表現に生きる鑑賞の資料を準備



描画： まずは模造紙にポスターカラーで



子ども太鼓のやぐらの色はこの朱色かなあ。

描画： 友人のポーズを見ながら描く



沈みそうな舟であわてるいじめっ子三人は、友達のポーズを見て描く。

鑑賞： 模造紙に描いた絵を鑑賞



模造紙の絵に助言する田島先生

鑑賞： 模造紙に描いた絵を鑑賞



絵を講堂の壁面に掲示

描画： 雷がとどろく黒雲を描く



迫力のある黒雲はどう描こうか？

描画： 背景はどんな色に？



色づくりをする田島さんの手元をじっと見る子どもたち

通って描きました。真夏の講堂の蒸し暑さ、熱気は相当なものです。それでも、毎日二時間、一週間にわたり子どもたちは描き続きました。田島氏も学校の先生方も噴き出す汗にぐっしょりなりながら子ども達の相談にのり続けました。

ほとんどのグループは高学年がリードして進みましたが、低学年が描く人間を見て、中学年、高学年が手を動かし始めるというグループもありました。

まばらだった祭りの場面は、愉快地楽しんでいる人が溢れてきました。真っ黒の炭団のような目は、友達を真似て白目を描き足し、本当に見ているような目になりました。いろいろな角度に曲がっている手足が描かれ、人だけでなく犬や猫、友人や担任の先生まで画面に描かれていきました。

自分の分担場面ができた子は、その場面にふさわしい文章の作成をします。他の場面の応援に回る子もいます。

そうして七月末、ようやく全部の絵が仕上がりました。

描画：夏休みも描いて、やっと仕上げる



蒸し暑い講堂で、描き続ける子ども達

描画：文章スペースは空白に



空には文章が入るからあけておこう。

描画：イメージを広げて描く



窓から見てる人も描こう！

描画：大小を考えて描く



神輿の上で太鼓をたたく人と、神輿をつぐ人の大きさは変えて描く。

描画：夏祭りの賑わいを描く



祭りにどんな人が来てたかなあ...

描画：手がどんどん動き出す



夏祭りを楽しんでいる人を、100人描こう！

鑑賞：資料で昔の様子を調べる



鑑賞：絵巻物の図版を見ながら描く



船にどんな人達がのっているのか、絵巻物を見てみよう。

鑑賞「天神様の美術展」のカタログを見て描く



文章：絵が語っていないことを、文章で表そう。



文章は短く！

描き終わった子ども達は、絵を見ながら文章を考える。



鑑賞：完成作品の鑑賞



完成した19枚の絵は、床に並べてみながら鑑賞。

完成した絵は、どれも素晴らしいものでした。田島氏も驚く程の作品でした。どの場面も子どもの強く輝くエネルギーに満ち溢れていました。夏祭りの場面にも、夜店の賑やかな場面にも、まさに人が百人いるようでした。一人一人の個性ある表情に思わず吹き出しそうになりました。子どもにしかか描けない絵でした。その絵の中に、描いた子ども達が、友達が、先生が描かれていました。

全て出来上がった絵本の原画を並べて、みんなで鑑賞しました。どの子もやっと仕上がったという満足感、成就感いっぱいの表情で歓声をあげながら見ていました。

7. 子どもの変容

豊崎小学校の子ども達は、全員描画が好きかといえばそうではありません。絵に苦手意識があり、思う色がつかれない、どう描けばいいかわからないと手が止まりがちな子どもも多かったです。

また豊崎小学校は図画工作科の研究指定校でもないし、専科の先生も、市教委の図画工作科教育研究会の先生もおられません。子ども達も先生方も、たまたま創立百周年の年に学校におられ、田島征彦氏にご縁があったから、絵本づくりをすることになったわけです。

それなのに、最初手も止まり体も固まっていた子ども達が、なぜ蒸し暑い講堂で、最後まで生き生きと、黙々と描き続けたのか。描き上げた時に満面の笑みを見せたのか。私は驚くとともに、その変容のわけを知りたいと思いました。(田島氏がおられたから？百周年行事を成功させたかったから？講堂に全ての先生が集まっているから？)どれも少し違う・・・。自分なりにいくつか考えてみました。

まず一番目は、この絵本づくりが子ども主体で対話が欠かせない活動だったこと。

ストーリーも絵も子ども達が自己選択、自己決定しながら進めていきました。これは田島氏はじめみんなが何よりもこだわったことでした。大人主導で形だけ子どもがちょこちょこ手を出す絵本づくりなら、ごまかしが嫌いな田島氏はさっと手を引かれたらうし、子どもの意欲も持続しなかったことでしょう。

指導要領改訂で、アクティブ・ラーニングという言葉が前面に出ています。子ども主体の学びをという声は昔からありますが、実際に学校で子どもが自らの意志をもって主体的に学ぶ場がどれだけあることか。いま子どもたちは教師からも親からも多くのことを教えられ、指示され、「せねばならないこと」に囲まれています。毎日の授業、宿題、漢字テストと忙しくこなす日々、どれだけ自らを見つめ自分なりの考えを発信する機会があるか。子どもたちは多くのせねばならないことでアップアップし、自ら考えることをやめてしまうのではと危惧します。子ども主体の活動は時間がかかりますが、その過程で子どもは確実に育ちます。この絵本づくりには子ども主体で対話をしながら制作をすすめるよさがありました。

次に二番目は、個に応じた支援がタイムリーになされたこと。

最初「肌色はどうやってつくるの？」「人間はどう描いたらいいん？」「船の色は何色やろう？」「横向きの人が描かれへん」と次々と聞きに来る子の対応に追われました。でも一つ一つの質問に相談に乗り、黙って手が止まっている子に話しかけて思いを聞き、ときには他のグループの描画を参考にしよう助言するなどを続けているうちに、どの子どもがどんどん自分で動くようになっていったのです。

どの子ども本来は描く意欲を持っているけれど、ほっておいてもその力は発揮されない。力を発揮できる場と時間を確保し、個に応じた適切な支援を子どもが求めてきた時にすることで、どの子ども自らの力を伸ばしていけるのだ、と実感できました。

最後、三番目に、表現指導と描画材料のよさが挙げられると思います。

子ども達の描画がのびのびしていたのは、導入で田島氏が自作絵本の朗読をされたことが大きいと思います。田島氏が描かれる素朴な人物像は、子どもに強いインパクトを与えました。また、下書きなしで描いたことでのびやかな表現が生まれました。

実は私も先生方も最初は、上等の大きな用紙だし、ポスターカラーで描くのだから、薄く鉛筆で下絵を描いたほうがいいと思っていました。でも田島氏は、「下書きをするとぬり絵になって絵に勢いが出ない。下書きはなし。線でなく、面でぬり広げよう」と子どもたちに指示されました。この描画時の指導は適切でした。

またポスターカラーという描画材料は最適でした。色も鮮やかで、すぐ乾きます。失敗しても白色を大きな刷毛でさっとぬれば真っ白な画面が出現し、すぐ色も乗せられます。何度でも安心して失敗できる、これは子ども達の気持ちを楽にしてくれました。

この絵本づくりは、学校のいろいろな場面で活用できるのではと、私は考えています。

豊崎小学校の子ども達は、この絵本づくりを通して、自分たちのくらし、学校、友人、地域のよさを見つめ、異年齢集団で力を合わせ、絵や文章を考える力が育ちました。

他にも卒業時の小学校生活の思い出、一年間の学級の印象深い出来事、修学旅行の思い出、総合的な学習で取り組んだ内容などを、絵と文章でまとめる活動も考えられます。絵本づくりの過程でも大きな育ちが期待出来るし、成果も形となって残ります。きちんとした絵本は費用もかかります。学校のカラー印刷で十分です。原画を製本して大型絵本として図書室に置くことも可能です。

プロの絵本作家が自分の学校にはいないから無理という声も聞こえそうです。これは違います。確かに田島氏は子どもの絵本の応援だからという甘い姿勢は微塵もなく、御自身の絵本であるかのように毎回真剣に取り組みました。朝早く淡路島を出て、真摯な姿勢で子ども達と向き合い、適切な助言をされる姿に私は深く感動しました。この絵本「かんこうさんが ふってきて」に描かれる素朴な人物像は、田島氏の絵本に導かれ、田島氏との触れ合いの中で生まれてきたものと言えます。

しかし、学校では指導者と子ども達がテーマ、表現方法、描画材料などを話し合っ決めて行けばよいのです。田島氏がされた助言は、みんなで制作途中の作品を鑑賞しながら対話を深め、次時の課題を導きだせばよいのです。それは、自分達の力で推し進める喜び、完成したときの成就感を更に大きくします。

確かに学校は忙しいです。しかし何に時間を割くかは、何に価値を置くかで決まります。価値あるならば、工夫して時間を生み出す、これはありかと。

私は子どもが自分の持てる経験、知識を総動員して考え、苦勞して自らが主体の活動を進めていくことができる機会を、あらゆる場で大事にしたいと考えます。

8. おわりに

絵が完成しても活動は続きました。子ども達の書いた文章から、最終文章を決定し、刷り上がったばかりの絵本にミリ単位で位置を決めて、文章を慎重に貼り付けます。印刷会社と、絵の色合いや文章の配置等の打ち合わせを何度もして、ようやく本が完成したのは、十月初めでした。

この絵本「かんこうさんが ふってきて」は、今年(2016)の4月にくもん出版から全国販売されました。絵本づくりの様子がわかる写真も24枚掲載されているので、参考になると思います。子ども達の強い輝きを感じられる絵本です。多くの方々にご覧いただけたらと願っています。



質疑応答

A : 今日の内田先生のご発表は「絵本作り」ということについてだったのですが、内田先生が「絵本作り」という題材を中心にして発表されたのとらえるべきなのか、それとも「子どもが作家と共に絵本を作った」ということを中心にしてとらえるべきなのかは難しい所だと思います。つまり、子どもにとっては作家である田島先生との出会いが起爆剤となってこの絵本ができたとも言えるのではないかと思います。それと、日ごろの授業のなかで先生が「絵本作り」を一つの題材として取り上げることとは違うことだと思うのですが。今回は、教育の場に絵本作家としての田島先生が入ってこられたということで、このように学校外から専門家に入ってもらって制作するという事は、子どもにとっては普段の授業では経験できない特別な思い出になる、ということもあったのではないかと思います。だからこの絵本も田島先生風になっているのかなあとも思えるのですが。

内部: 田島先生はこの絵本にまったく手を加えておられないのに、なぜこれが田島先生風の絵本になったのか、ということについては私もいろいろ考えました。そこで、私は導入時に使用した絵をもう一度見直してみたのですが、この絵本は導入時に見せた田島先生の絵と同じような作風になっているので、私は導入時に見せた作品が子どもの作品に強い影響を与えたのではないかと思います。

A : 子どもが最初に何を見たのか、何に出会ったのかということが作品にもこれほど影響するんですね。

内部: 私は、今までの「絵本作り」の授業では、導入時に私が大まかな方向性を示し、それをもとに、たとえば6つのグループでそれぞれ考えてアイデアを出し合い、それらのアイデアの共通点と相違点を話し合わせ、共通点が見つかる「それでは、すべてのグループが共通して取り上げたこれを皆でやっとう」ということを決め、それからそれぞれのグループの分担を決めるという方法をとってきました。そのような方法でもそれぞれのグループの話が一つの脈絡をもってつながっていくという経験をしています。たとえば、私が以前取り上げた「町づくり」という題材においても、すべてのグループに共通する「核」のようなものを示しさえすれば、その後で各グループからいろいろなアイデアがでたとしても、それをつないでいくと一つの筋の通ったストーリー性をもった絵本ができあがったという経験をしています。

B : 私はこの「絵本作り」がとても新鮮なものとして感じられました。私は、中国で子ども達が1枚の紙に全員で絵を描くという題材をあつかったことがあるのですが、その時にはそれぞれの子どもがそれぞれのテーマで一枚の紙に描いた絵の「寄せ集め」的なものになってしまいました。ですから、それぞれのグループのアイデアが連続性をもって発展、展開しているこの絵本にとっても感動しました。ところで、このアイデアの連続性は先生が指導することによってできたのでしょうか、それとも子ども達が作っていったのでしょうか。

内部:この絵本では、ストーリーを全員が共有し絵本を描き始めるまでにかかなりの時間がかかりました。「どのような絵本にするのか」「何をうたえるのか」ということを共有したうえで具体的なストーリーを作るまでにかかなりの時間を費やしたということです。

C :155人というのは全校児童の数ですか。

内部:はい。

C :155人を19のグループに分けたということは、1グループの人数は8人程度だったということになりますね。

内部:全校児童を各グループに均等に分けたのではなく、たとえば多くの人物を描かなければならないグループは10人程度に、描くものが少ないグループには5-6人というように、仕事の量によって各グループの人数を調整しました。

C :人数の少ないグループは5-6人だとすると、そこには1年生から6年生までが、たとえば各学年一人ずついるというような編成になりますね。

内部:グループ編成は、登校時の縦割りの「登校班」別に編成されています。

C :「縦割り」での活動はとてもおもしろいですね。「縦割り」で活動することによって子どもはとても成長しますから。

内部:小規模校では「縦割り活動」をすることがとても多いのです。子どもは、学年がちがっていても縦割り班が同じであれば、家の中の様子まで互いに知っています。私がかつて勤務した大阪市の上福島小学校での「対話型鑑賞」の授業も縦割り班があったので可能になりました。

C :絵本のストーリーの流れの相談は、高学年だけでおこなったのですか。

内部:はい。テーマとストーリーの流れは5、6年生だけで相談して決めました。そして、そこで決まったことを各班の指導にあたっている先生が1-4年生の子どもに伝えるという方法をとりました。このように5、6年生が主体にはなったのですが、各班の指導にあたっている先生を介して、常に全員にフィードバックさせながら制作を進めました。

C :そこまでの段階は、夏休みまでの授業の時間におこなったのですか。

内部:はい。常に全員が集まることは無理ですので、先生も「出席できる人だけでいいよ」と言っていたのですが、実際には多くの子ども達が集まってくれました。

C :「絵本づくり」がよほど魅力的だったのでしょうか。

内部:夏休み前の体育館という蒸し風呂のようなところへ制作のために集まるというのは、よほど好きでなければできないことだったと思います。

C :プール解放の日でも子どもはなかなか集まりませんよね。

内部:プール解放は午前中で、午後2時から4時まで制作しました。体育館の中はとても暑く、私も目が開けていられないほどの汗で、目がショボショボになりました。

B :先ほど内部先生は、子どものなかには絵が苦手な子どももいたとおっしゃったのですが、写真のなかのすべての子どもの表情からは、全員が制作をとても楽しんでるようすし、作品からも同じ印象を受けるのですが。

内部:田島先生は「先生は決して手を出してはいけません」と何度もおっしゃっていたので、私も「出過ぎない」ということを肝に銘じながら指導にあたっていました。ですから、私が先生方から指導についてのさまざまな相談を受けたときも、いつも「すべて田島先生のおっしゃるとおりにしましょう」と答えていました。そのようにしていますと、いままでまったく描けなかった子どもも見違えるほど描けるようになりました。

C :先ほどの内部先生の「内心私は、いつも前向きの人ばかりえがくのではなく横向きの人を描いてほしいと思っていた」ということも、子どもが絵本全体のストーリーの流れのなかで自分が担当している場面を考えると「ここは横向きの人でなければならない」と思うようになる、つまり、横向きの人を描く必然性が自分のなかに自然に生まれてくるのでしょうか。

内部:たとえば、この場面で子どもは「ここにはどうしても教頭先生を描きたい」と思ったのです。教頭先生はいつも腕組みをしているのですが、子どもは「どう描けば腕組みをしている姿が描けるのか」がどうしても分かりませんでした。しかし、自分でいろいろ試行錯誤しているうちに、どうにか自分で満足できる姿を描くことができました。また、校長先生の座っている椅子の背もたれと画面のバランスから子どもは教頭先生の椅子の背もたれをもう少し大きく描きたいと思ったのですが、先に描いた椅子の灰色と同じ色をどうしても作ることができませんでした。そこで、私が「少しだけ赤を混ぜてみたらどうか」と助言をすると、もとの灰色に近い色ができたので、子どもは大変驚いていました。そして、その子どもが「先生、ほかの色を混ぜてもいろいろな色ができるかなあ」と言ったので、私が「それはおもしろいね。いろいろな色を混ぜるとどんな色ができるのか、全部試してみたらどう」と言うと、子どもはいろいろな色を混ぜ、新しい色ができたときに「あーほんまや、こんな色ができた」とそのつど感心していました。また、ここに描かれている人はもう退職した管理作業員さんなのですが、この人も是非描いてみたいということで、子どもは校長室にある管理作業員さんの白黒の写真をスケッチしてきて、それに彩色してこれを描きました。

A : スケッチしてきたものを彩色するとき、子どもがこの服の色はこんな色でなければならないというこだわりをもって色を決めたことは、この絵からも分かります。

内部: 校長室にずらっと並ぶ歴代校長の写真を描いていたある子は、自分の担任の先生をもそこ(右図黄矢印)に描き込んでいました。その先生は「子どもは、私も描いてくれたのですよ」と、とても喜んでいました。豊崎小学校は小規模校なので、学級担任の先生は7人しかいません。でもグループは19ありますので一人の先生が2-3のグループを掛け持ちし、ずっと走り回りながら子どもといっしょに考えたり、苦しんだりしながら指導にあたっていました。ですから、この絵本が完成したときに私は、校長先生に「この絵本ができたのは、担任の先生方がそれぞれ一生懸命支えてくださったおかげです。ですから子どもだけでなく先生方もぜひ褒めて上げてください」と言いました。



C : いやーっ、本当に感動的ですね。とても参考になりました。

D : 今までのお話で「絵本作り」の時には、最初にストーリーをしっかりとっておかなければならないことがよく分かりました。ところで、同じ人が違う場面に出てきた時に、服装は同じでなければならないし、絵本でも同じ服装で描けているのですが、その話し合いはいつどのようにおこなわれたのでしょうか。もし私が指導したのであれば、同じ人が違う場面にでてきたときには、服装はバラバラでも良いと言ったかもしれないと思うのですが、内部先生はこの「絵本作り」において、「絵本」をどのように考えておられたのでしょうか。

内部: 「絵本」について私は、基本的には「絵と文章で自分たちのイメージを表したもの」と考えています。そこで、たとえば19のグループにそれぞれ19の場面すべてを描かせ、その中から先生がもっとも良い19の場面を選んで1冊の本にするということは、子どもに対してとても失礼な、大人の考え方による方法だと思っています。田島先生はこの絵本の制作にあたっては「『子ども』に良い絵本を作らせたい」ということのみを念頭におかれてボランティアとして指導してくださいました。指導の後の打ち合わせが夜の7時頃までかかることもあったのですが、そんな時でも田島先生は夕食もとらずご自宅のある淡路島まで帰っておられました。田島先生は今まで40冊ほどの絵本を出版されているのですが、そのなかで出版社からの依頼で作った絵本は3冊だけで、残りはすべてご自分が作りたいと思った絵本を、ご自分が納得できるまで時間をかけて作られたそうです。なかには1冊作るのに2-3年も時間をかけてつくられた本もあるそうです。つまり、ご自分が作りたいと思った絵本は、ご自分が納得できるまで取材し、制作し、そのようにして絵本ができた後で、それを出版社に売り込むという方法をずっととってこられたそうです。そのような方法をとられていたので、30歳頃まではまったく絵本は売れなかったそうです。田島先生はそのような先生ですので「子どもの絵本作り」に取り組むときも、ご自分の「絵本作り」と同じように真剣に取り組んでくださいました。ですから、この絵本も「19のグループがそれぞれ描いた場面をつなぎあわせると、それで絵本になるのだ」という姿勢で取り組んでくださいました。

D : そのように、ご自分に対してとても厳しく絵本作りに取り組んでこられた先生が、子どもの指導にあたるさいに、どこまで子ども達の考え方を受け入れることができたのでしょうか。

内部: 田島先生にとってこの絵本は「子どもの絵本作り」に関わられた2番目の絵本です。最初の絵本「浦島太郎」のときには、基本的には子どものアイデアを尊重されたのですが、表紙の絵だけは、子どもの描いたものではどうしても迫力に欠けるということでご自分で描かれました。ですから、私は「田島先生も、絵本としてこの部分だけはどうしても必要だと思われた時には、ご自分で手をだされるのだなあ」と思いました。今回の絵本の場合は、子どもが描いている2時間は一切手をだしたり意見を述べたりはしませんでした。しかし、絵を描き終えて子どもが帰った後、田島先生はその日描かれたすべての絵を長い時間ご覧になりながら「うーん、ここはなあ」と考えて、たとえばこの絵は最初淀川の堤防が描かれていたのですが「この堤防はいらんで」などとそれまで誰も気づかなかった最終的な判断をされていました。先生方は田島先生のそのような指摘を「なるほどなあ」と思いながら聞き、お言葉を一言漏らさずメモし、それをもとに翌日の指導の手引きとしていました。また、そのような話し合いの場で先生方の意思統一ができたので、次の日の制作も子どもと先生だけでできたのです。そのようなことにとっても時間がかかったので、終わりが夜の7時頃になるということがしばしばあったのです。私は、そのような経験をするなかで、「文章と絵で子どもの思いをまとめる」というテーマでくると「絵本作り」は、それがたとえ蛇腹形式の本やパラパラ漫画風の本のようにどのような形式の本であっても、それまでのそれぞれの先生の図工の授業の流れのなかで実践できるということに気づきました。

C : 文章を考えるさいには「できるだけ短く」とおっしゃったことが、私にはとても興味深く感じられました。内部先生は、子どもがその場面での出来事をすべて文章で表そうとするときに「その所は、皆分かるよね」という言葉で文章を簡潔にする指導をされたとおっしゃったのですが、どのようにして「皆分かるよね」という状態を作られたのでしょうか。

内部:各グループが担当した場面の説明の文章は、1-6年生のすべての子どもがそれぞれ何度も書いているのでたくさんあります。先生全員が集まってそれらの文章すべてを読み合わせ「この言葉は、この場面では是非つかいたいね」というように意見を出し合いました。私が以前読んだ田島先生の「ふしぎな友達」という絵本にすばらしい文章があったので、私は田島先生がどんなふうはこのようなすばらしい文章を書くことができたのだろうと思い、一度絵と文章をすべて自分でかいてみたことがあります。そうすると「絵で語られたことは、文章ではまったく書かれていない」と「その文章によって絵の意味が深まる時には、たとえ長くなっても必要な文章はすべて書かれている」ということが分かりました。そこで、今回の絵本についてもその二つを基準に文章を判断していったのです。

D :内部先生がこの絵本の内容に直接関わった点はどのようなところですか。

内部:私はこの地域の夏祭りに参加したことがありませんので「この夏祭りをもっとも端的に表している言葉は何か」ということが気になりました。そこで先生に夏祭りの音を録音してもらいました。また、夏祭りで太鼓を叩いている子どもに校長室にきてもらって太鼓を叩くときのかげ声を聞かせてもらい、それを私が復唱し子どものOKがでるまで何度も繰り返しました。かけ声は独特のリズム、強弱、音程をもっていますので、子どものOKが出るまでに何十回か繰り返さなければなりません。そして、その時のかげ声をカタカナであらわしたのがこの言葉「ヨイヤー！ ソコジャッ チューツサ カーターセツ！」です。

C :その意味では、この絵本は子どもと先生との合作ともいえるのでしょうか。

内部:学校をあげての「絵本作り」では、一般的にはほとんどの部分を先生が作り、要所要所の目立つ所だけに子どもを出演させる、ということが多いのですが、田島先生はそのような方法を絶対に認められませんでした。私は何よりもその姿勢に感動したので、最初思っていた時間の何倍も時間がかかったのですが苦にはなりません。

この、木の頁だけが縦描きになっています。これは子どもが描いた時には横描きだったのですが、それだと木の高さをあらわすことができませんので「こんな低い木だと、3人が登ったとしてもすぐに下りられてしまう」ということを田島先生をふくめ全員の先生と話し合っているときに、私は田島先生の沖縄のガジュマルを描いた絵本にこのような場面があったことを思い出しました。そこで「田島先生、先生の絵本にも1頁だけ縦描きになっているものがあって、この絵本でもこの木の頁だけ縦描きにしてはどうでしょうか」と言いますと、田島先生はしばらく考えた後「そうしょうか」とおっしゃいました。

C :この「絵本作り」を通して子どもがとても成長できた理由を三つ挙げていただいたのですが、そのなかでこの絵本が個人作品ではなく共同作品であったということは、どの程度の意味をもつのでしょうか。

内部:とても大きな意味があったと思います。最初はあまり熱心でなかった6年生が、制作が進んでいくにつれて夢中になり「あの先生も描くで、あの人も描くで、この人も描こうよ」と言い出し、グループ全体が「100周年記念のこの絵本を是非完成させたい」と思うようになった時に、1年から6年までの親密度はそれまでよりはるかに高くなったことが実感できました。また、それに伴って子どもに学校で会ったときの挨拶の声も大きくなりましたし、私が学校に行く途中で子どもに会った時にも「内部先生、僕〇〇です。こんにちは」と大きな声で挨拶してくれるようになりました。このように絵本作りを通してすばらしい連帯感が生まれていることをひしひしと感じました。

C :子ども主体に活動させたことが子どもの成長につながったということは、つまり、個人での活動が全体の活動になってきたということなのですね。

内部:写真の例で説明しますと、個人旅行のスナップ写真はそれだけで意味を持つものですが、修学旅行のグループ写真を見るとその前後に友達同士で行った所、見たもの、話をした内容などのすべてが、個人旅行のスナップ写真を見た時よりはるかに多く思い出される、ということと同じではないでしょうか。

C :私は内部先生のお話を、「絵」を「書」に置き換えながらうかがっていたのですが、絵のような自由な形や色をもたない「毛筆での文字」と「文章」で、自分の思い出や感じたことを書くとうなるのか、ということと、「書」はほとんどが個人活動なのですが、それを協同的な活動にすることは可能なのかということを考えていました。

内部:「書」という点についてなのですが、「絵本作り」に先立って「天神さん」のいろいろな資料を鑑賞したときに、ある子どもは天神さんの歴史を、障子紙に筆を使って「菅公さん」の姿と文章で、絵巻物としてあらわしました。また、卒業記念として、小学校時代の思い出を筆と墨で絵巻物を作ったのですが、それを表装するととても良いものができました。

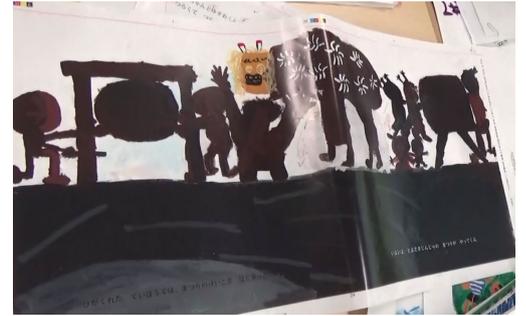
C :絵であれ書であれ、作品は「大きさ」によっても魅力がずいぶん変わりますね。もし内容が同じであるとすると「大きな作品」の方がより魅力的に感じられると思います。

内部:絵本を大きくすることで子どもがとても喜んだという経験は、私もしています。

B :いずれにしても、この絵本の絵はすばらしかったですね。

A :子どもの頃にこの絵本作りのような経験をすれば、絵に対する見方、価値観も変わってくるのでしょうか。今日原画を見せていただいて、いろいろな所にさまざまな工夫がされていることが分かりました。特に、表現に困った所には工夫の跡がはっきりと残っていました。子どもが表現に困って先生に質問した所に、子どものこだわりが生まれているのではないかと思います。たとえば、この絵本で白い服を着ている人にはすべて輪郭が描かれているのですが、線で描かれた所と面で塗られている所のバランスが絶妙で、子ども達になぜこのようなことができたのか、私には不思議でした。

内部:そこは田島先生の指示によるものです。主人公以外の人物で、複数の場面に登場する、たとえば脇役 A のような人には白い服を着せて外側に輪郭を描こうというような約束事は、制作が進むにつれて徐々に決まってきました。また、夕方の場面では、最初人物はそれぞれ彩色されていたのですが、田島先生は「この場面の人物は獅子舞だけを残して全部塗りつぶさない」と指示されました。人物を塗りつぶすことによって獅子舞を際立たせるという、そのような助言は私にはどういできませんので「さすが・・・」と思いました。



A :そのような点がいいろいろな所にちりばめられており、子ども達がそれらをすべて学習できているということは、絵から強く伝わってきます。

B :そのような指導のおかげで、それぞれの場面に個性が生まれると同時に統一感も生まれているのでしょうか。

内部:子どもが困っている時に、適切な指導・助言をすることは是非必要なことであることを、私は田島先生から改めて学びました。

B :内部先生の共同制作から思いついたのですが、たとえば書道で大きな一枚の紙に、画数の多い漢字を一字、一人一画ずつ書いて漢字を一字作るということを、内部先生はどのように思われますか。2画目を書く人は1画目の線と用紙全体のバランスを考えて書き、3画目を書く人は1・2画目の線とバランスを考えて・・・ということなのですが。

D :美術では、40年ほど前に「回し絵」という題材が開発されました。最初全員に画用紙を配って、描き始めてから一定の時間がたつとその画用紙を次の人に回すということを繰り返して絵を完成させるというものです。

C :共同制作によって子どもが育つのは、子どもが何歳ぐらいまで有効なのでしょうか。

内部:たとえば、壁一面に何かの絵を共同で描くということは大人でもしていることなので、年齢には関わらないことではないでしょうか。

福光:それでは時間がきましたので、他にご質問、ご意見がなければこれで終わりたいと思います。内部先生ありがとうございました。